

吉原治良作品調査についての報告書

大阪新美術館建設準備室 外部研修生

中島 小巻

1. 研修内容

近年、吉原治良（1905-1972）をリーダーとして1954年に誕生した前衛芸術集団「具体美術協会」（具体）は、海外でも展覧会が開催されるなど国内外を問わず熱い注目を浴びている。大阪新美術館建設準備室には、「具体」結成以前から日本前衛美術の草分け的存在であった吉原の作品が約800点以上収蔵されている。

本研修では、担当学芸員の指導の下、吉原の油彩作品の状態調査を行い、美術的観点から今後の修復作業について検討した。詳細には、ペンライトで画面を照らしながら、付着物の有無や絵具の剥離、亀裂、折損、汚れなどの状態を点検し、作品ごとの調書を作成した。また、今後さらなる劣化の恐れのある作品については、画面の状態とカンヴァスや棧の強度を確認し、適した梱包材や緩衝材を用いて再梱包を行なった。

作品の状態調査を行ない現状把握することで、修復作業の優先順位を見極め、作品の劣化を未然に防ぐことができる。作品の劣化を防ぐことは、作品保存と同時に、よりオリジナルに近い状態で鑑賞者に作品を公開する上でも重要である。

2. 研修日程

2016年6月23日、7月7・14・21・28日 いずれも9～12時

3. 調査作品

吉原治良油彩作品 55点

4. 研修を通して学んだこと

本研修で調査した作品の多くは、習作がほとんどで展覧会に出品される機会は少ない。習作のなかには、吉原が思い付いた構想を瞬時にカンヴァスへ描きなぐったような描画のメモとも呼ぶべきものも数多く見られた。よって、習作には絵画理念や描くプロセスが鮮明に表出されており、吉原研究を進める上で非常に重要である。

とくに、今回の状態調査では、1950年代後半～60年代にかけてのアンフォルメル時代の作品が多く、激しい筆致と厚塗りのマティエールの画風が際立っていた。【調査報告】③～⑧）それらの作品からは、アンフォルメル絵画という欧米の新しい美術動向に敏感に反応しながらも、独自の絵画表現を開拓するために模索をくり広げ、次々と実験的な作品を手掛けた吉原の様子が見てとれる。時に、絵具の物質感を保ちつつ、パレットナイフで絵具を塗りつぶし画面を平坦気味に構成する場合や、荒々しい線描の記号風モチーフで画面を覆うこと、また一つの画面で同時にその絵画表現を実践している作品もある。従っ

て、アンフォルメル時代の作品から共通する特徴を見出し一元的に捉えることは難しい。この頃、50号カンヴァスの試作品を数多く残した。恐らく、実業家でもあり潤沢な制作資金があった吉原が、練習カンヴァス用に一括注文したものと考えられる。そのため50号カンヴァスは、描きかけの作品が数多くあり、描く手順がよく把握できた。今後、それら一連の習作と具体美術展などの展覧会出品作を時系列に照合することで、吉原のアンフォルメル絵画に対する問題意識の変遷を追っていきたい。

同様に目を引いた作品は1950年代初頭の線描の作品である。吉原の線的抽象は、単に画面上に線を描くのではなく、地を塗り重ねることによって、線というモチーフを画面に表出させていることがある。それらが吉原の代表作である晩年の円の画法ともつながっていることは大変興味深い。当初から、吉原が「地と線」の関係性を問題意識の大前提としていることを再認識することができた。

先述した通り、アンフォルメル時代の作品には、あらゆる運筆の手法や吉原が意図して残したであろう小石や新聞紙などのコラージュがあり、多くの試行錯誤の跡を確認することができる。しかし、それらの試行錯誤を強引に推し進めた結果、異なる性質の絵具が塗り重ねられ定着せずに、画面の剥落やひび割れの原因となっている。また、コラージュ等の付着物は、それが意図して付けられたものなのか、後に偶然付着したものなのか、判断することが非常に難しい場合がある。よって、近年の修復作業は、作品の元々の状態を損なわないためにも、必要最小限の処置にとどめる傾向が強いという。本研修を通して、修復作業には、状態改善や劣化を遅らせるという利点と同時に、作品の情報が失われるかもしれない危険性があることも学んだ。

本研修で目にした作品は吉原の膨大な画業の中でほんの55点に過ぎないが、実験の爪痕が残る習作を調査できたことは、吉原の人物像や問題意識を肌で感じ取る貴重な経験となった。

【調査報告】

①作品番号：C-93

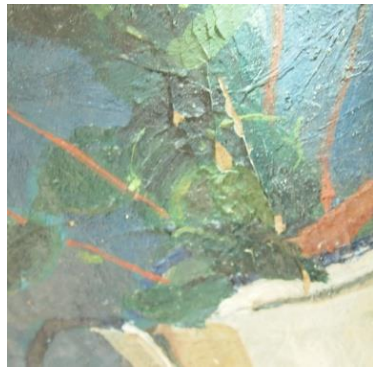
題・制作年：《白いポットと花と果物》制作年不明

技法・素材：油彩・カンヴァス

作品寸法：45.0×52.0 cm（額なし）

所 見：めくり状態、変形、ホコリ&カビ

〈画面〉オモテ



③白いヨゴレ部分



②作品番号：6-14

題・制作年：《作品》1951-52ca?

技法・素材：油彩・カンヴァス

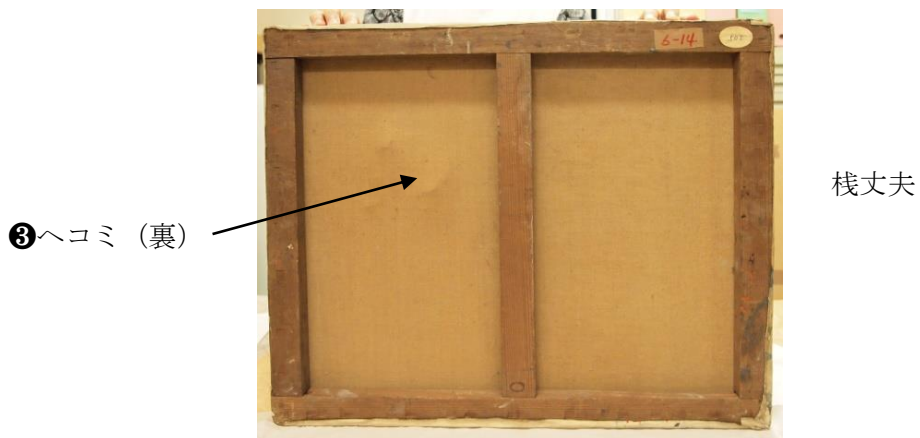
作品寸法：45.8×53.2 cm（額なし）

所 見：右下部にサイン（yoshihara）あり→修復優先度は高い

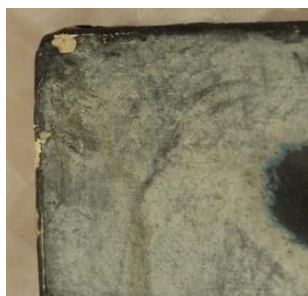
〈画面〉オモテ



ウラ



①ハクラク部分



②ハクラク部分



③へコミ（表）部分



③作品番号：A-159

題・制作年：《作品》1956-57ca?

技法・素材：油彩・カンヴァス

作品寸法：45.5×65.0 cm（額なし）

所 見：画面全体に剥落箇所が目立つ

〈画面〉オモテ



全体的にヒビ
縁スレ

← ①カケ

ウラ



栈丈夫
カンヴァスヨレ

①カケ部分



こげ茶ハクラク部分
(こげ茶色定着悪い)

ウキ部分



④作品番号：7-106

題・制作年：《作品》1957-58ca?

技法・素材：油彩・カンヴァス

作品寸法：52.8×45.9 cm（額なし）

所 見：右下部にサイン（yoshihara）あり→修復優先度は高い

画面中央にラメ→作家の意図によるものか、後に付着したものか判断が必要

〈画面〉オモテ

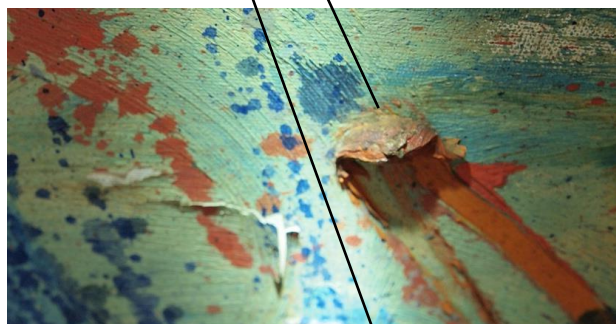
ウラ

栈丈夫

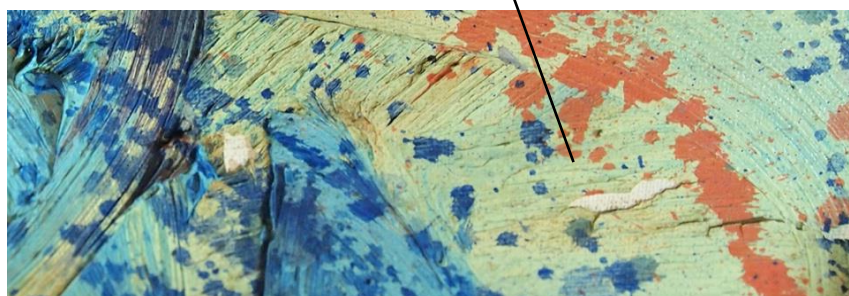


全体的にホコリ
→要クリーニング

ウキ



ハクラク



⑤作品番号：A-76

題・制作年：《作品》1956-57ca?

技法・素材：油彩・カンヴァス

作品寸法：116.5×91.2 cm（額なし）

所 見：深いヒビ多数、絵具突起部分にホコリ

〈画面〉オモテ



①ヒビ（欠損の恐れあり）部分



①ヒビ部分拡大



栈弱い

ウラ



縁ヨゴレ

栈ゆるみ



ケズレ



⑥作品番号：A-94

題・制作年：《作品》1957-58ca?

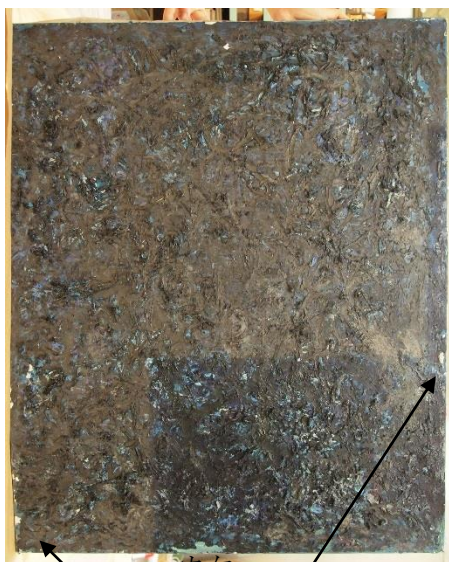
技法・素材：油彩・カンヴァス

作品寸法：72.7×90.7 cm（額なし）

所 見：修復要検討／面と絵画ストローク試作→修復によって作家の意図が消失する恐れあり

〈画面〉オモテ

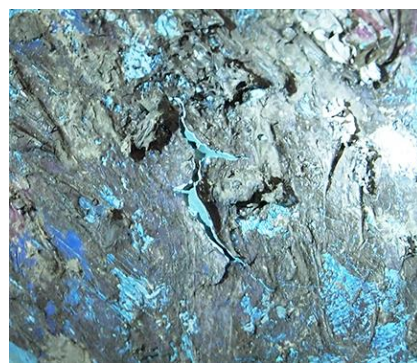
ウラ



全体的にホコリ
→要クリーニング

カケ
ハクラク部分

カンヴァスボコボコ&ヨレ
ウキ部分



ハクラク部分



⑦作品番号：A-50

題・制作年：《作品》1957-60ca?

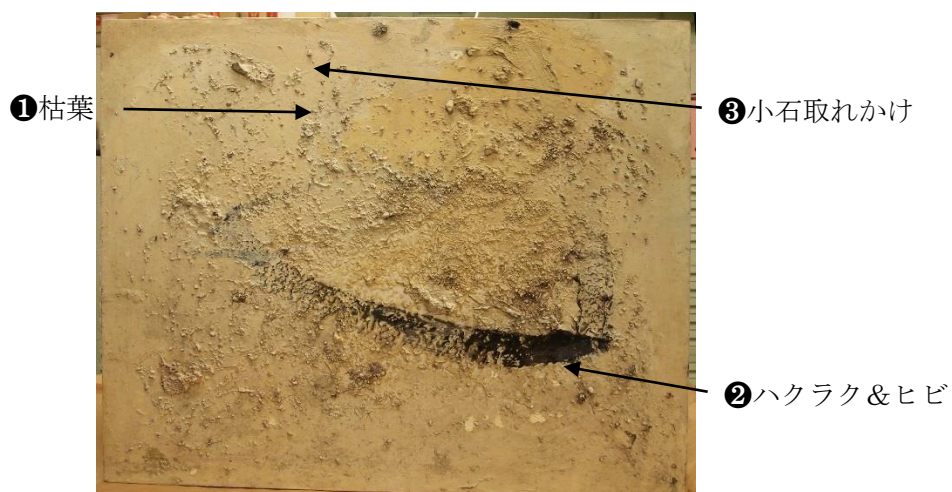
技法・素材：油彩・カンヴァス

作品寸法：91.0×73.0 cm（額なし）

所 見：ヒビ、ウキ、剥落が目立つ作品

左下部に枯葉の付着物あり→画面注意

〈画面〉オモテ



ウラ



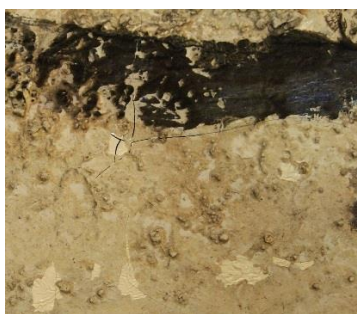
カンヴァスヨレ

中央左側棧付近に穴

① 枯葉

② ハクラク&ヒビ部分

③ 小石取れかけ部分



⑧作品番号：7-117

題・制作年：《作品》1957-60ca？

技法・素材：油彩・カンヴァス

作品寸法：91.0×73.0 cm（額なし）

所 見：額に入れる／絵具突起部に紙の繊維付着→鑑賞の妨げ
小石の付着物あり→かなりの重みあり、画面注意
カンヴァスの縁部分、欠損の恐れあり

〈画面〉オモテ

縁の絵具が欠ける
恐れあり



下地と絵具
きちんと定着

砂混ぜ・重い作品
→棧耐えられる

絵具突起部に紙の繊維

絵具突起部に紙の繊維



⑨作品番号：A-77

題・制作年：《作品》1962ca？

技法・素材：油彩・カンヴァス

作品寸法：116.8×91.0 cm（額なし）

所 見：クリーニング必要

絵具突起部にホコリ

〈画面〉オモテ



斜線部分ヨゴレ
（日焼け？）

ワレ&ウキ部分

ウラ

棧丈夫



⑩作品番号：7-125

題・制作年：《作品》1962-63ca？

技法・素材：油彩・カンヴァス

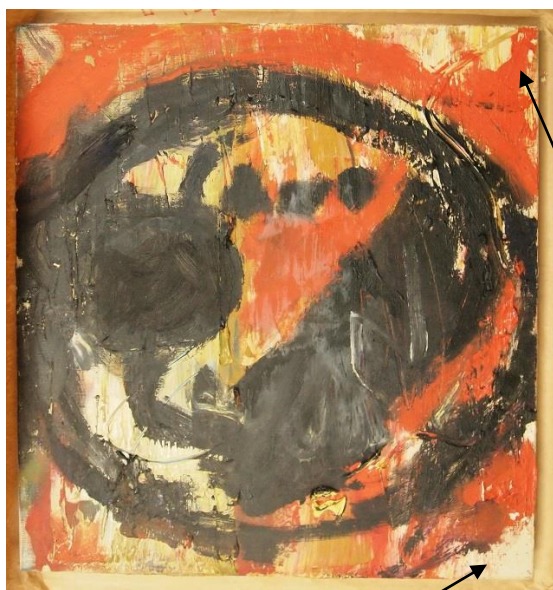
作品寸法：53.0×45.4 cm（額なし）

所 見：要修復&クリーニング

作品状態最悪→梱包なし平置き

赤絵具の劣化が激しい→マット感を保つためニスをかけないことが原因？

〈画面〉オモテ



全体的に白濁化

ウキ&ハクラク部分

ウラ

棧丈夫



カケ&ハクラク部分

